

# 日本漁業經濟發展過程の解明

——特に坊津鰹漁業についての一考察——

原 多 計 志

An Interpretation of the Developmental Process  
of Fishery-economy in Japan

—— Especially a Consideration on the  
Bonito-fishery at Bōnotsu ——

Takeshi HARA

は し が き

漁業の發展を業態的に見るとき、鰹漁業は特殊性をもっている。いち早く發展の芽を見せながら小企業にとどまり集中度が少い。一般的に漁業の特殊性は生産・流通における計画樹立の困難さにあるといえよう。即ち生産数量予想の困難さであり、而も全体としての予想はほぼ可能であつても生産の時期、或はもつと小さく航海毎に予想されないという点である。云うならば生産が時間によつて予測されないのである。

註 この事が漁業の不安定といわれるものであり、魚価の維持を困難にしたものであつた。然し、生産の予想はより發展した場合、大体に可能であり、生産の配分も冷凍及び加工の發展によつて調節され得る。但しその場合、より發展した段階、それ故に資本を要求すること勿論である。

鰹漁業においてはこの特殊性はもつと強くあらわれる。底曳網、まぐろ漁業に対比しても、もつと没時間的である。漁業は所謂、クリティカルモメントを中心とする漁撈に体系づけられた作業であるが、特に鰹漁業にあつては作業期間そのものが1時間を出でないのであつて、残余の航海日数は魚類発見のためであり、生産時間とは独立せる変数である。

更にそれのみに止まらない。「鰹漁業が殆んど協業乃至分業の余地のない程に個別的な労働形態であり、その手工業的技術(技能)は習得に最も長く年限を要するものである。したがつてそこには本来的な徒弟制度が行われていた。熟練者と未熟練者との関係はそのような親方と子方との関係であり、ツンフト的性格はそれ自体形成されていた。」—日本漁業經濟發展史序説—。そこで資本は船頭、舟子を結ぶ団体を承認しなければならず、その撰択あるいは監督の為には事情に通ずる必要があり、資本の流入に障碍となるものであつた。

かくして鰹漁業は資本にとつて、決して魅力ある対象ではなかつたのである。それ故にその發展は漁村の担う所、否むしろ担はされた所であつた。鰹漁業が小企業としてしか残らない理由はここにある。この意味において、その發展を研究する場合、鰹の村ともいえる坊津はより注意される必要がある。

最近、再び発行された「坊泊水産誌」に補註を加える所以も亦ここにある。

説 明

坊津を鰹の村という所以は、殆んど村民が鰹漁業に依存しているということだけではな

い。鯉漁業として古い歴史をもち、その間に發展と衰退の典型をもっているからである。即ち、天保の頃には天草、五島を支配下に収めた鯉節の間屋があり、明治に入つて40年には既に坊泊鯉漁業株式会社が成立し、動力船の先駆、静岡の試験船富士丸におくれること2年、41年には西洋型動力船舞鶴丸を建造する等、全国的な先進地を形成していたからである。而も、この鯉会社も大正11年には解散し、全国的な漁船大型化競争に取残された小漁村となり、終戦後三転して發展するという変転のうちに漁業發展の解明への資料をもつからである。

例1. 坊の森家所蔵、天保13年大阪和泉屋より森吉兵エへの仕切書は薩摩節、天草節、五島荒節と銘柄が書きわけてあり、その1回の仕切額は2千兩を越えている。

「当時、天草節は製品を買い集めたものであり、五島のものは資本を出して鯉漁業を經營させていたものである」(現森吉兵エ氏談)

例2. 会社設立の模様を旧坊泊水産誌は次の如く書いている。

「明治39年12月、臨時総会を開き同業者全員一致の協定を経て自ら進んで發起となり祖先伝来の遺業をあげて会社組織に変更し資本金6万円(1時払込)1株20円とし一部を公募した」「株式は最初2千5百株の予定なりしが申込書4千株以上に達したので3千株にした」

静岡県焼津の東海漁業株式会社と対比せせられよ。その資本金3万円、「茲に於いて片山氏は株式を一般の公募に依る事とし、焼津水産会社代表社員、吉井孝作氏を訪うて一切の事業計画を打明け、氏の助力を乞うたのであつたが同氏も……総ゆる助力を惜まぬと賛意を表したので片山氏も之に依つて大いに力を得、町有志に対して株式応募の勧説を開始したのである」(東海漁業株式会社三十年史)。熱意の差あきらかである。

例3. 35噸、35馬力の舞鶴丸は鯉漁船としては民間における嚆矢であつたが、ついで同年和船型25馬力4艘を建造、明治44年迄に全部を動力船に切替える等、全国的に最高の技術をもつていた。更に餌料確保のために生産地から餌料を運搬し、蓄養する等、恐らく当時としては最高の經營法をして

第 1 表

年	坊 漁 船	漁獲高 (千尾)	額 (千円)	東海の 漁獲額 (千円)
明治 40	21	176	113	—
41	21	115	55	110
42	19	207	97	240
43	14	207	77	260
44	10	261	132	320
大正 1	11	254	153	440
2	10	303	102	450
3	10	339	182	460
4	11	270	162	420
5	10	226	107	320
6	10	467	246	770
7	10	465	314	780
8	10	120	320	820
9	9	253	251	540
10	7	210	266	920
11	6	92	91	1,210

いた。  
例4. 然し乍ら、後から発足した東海漁業が發展をつづけるに反し、坊津は衰退をたどる。「されど漁場の延長に伴い船の屯数に加えて船内の施設により乗員の増加をみたすなど經營上資金の増加を要する時が来た。一面經濟界の好況は鯉節の価格の騰貴を招来し、個人經營にかかる新造船が濫出し大正11年度の如きは会社所有の漁船21(補助船及び休業船を含む一筆者)に対し個人船16艘を数うるに至り次年度に於ける漁船の釣子たる漁師の争奪は各所に於て演ぜられたために資金の増加に伴ふ經營難は益々加はり

遂に会社は倒産の寸前に於て」大正12年解散した。(坊泊水産誌)。

第1表は当時の漁船数と漁獲高を示す。東海漁業のものも参照におく。

東海漁業における大正6年の漁船数は30艘であり、1艘当り漁獲高は差異は認められない。然し乍ら会社の比較において優劣は分明である。東海漁業がますます集中するに對し、坊のそれは分散の形をとつてゆく。発展と衰退との明暗である。

爾來、個人経営が行われるが、大正末期から始まる漁船大型化の競争に立ちおくれ、全国的には勿論、県下においても枕崎に繁榮を奪われるに至つた。昭和10年、東海漁業の所有船中70屯以上のもの21隻、坊津においては6隻に過ぎない。

例5. 戦後においては三転し、100屯級11隻となり、漁獲高は枕崎在籍のものと同敵するに至つている。

以上、坊津が鯉漁業発展の解明の好資料たることを示す。この変転の解明こそ必要である。

## 解 釈

まず当初に坊津の鯉漁業の発展の説明が必要となる。

一般的の自然条件から鹿児島島の鯉漁業は、漁場に近い利点と、中央市場に遠い不利との相反する2条件の上に立つている。社会の発展段階によつてその何れかが決定的な強さをもつ。坊津の明治前半迄の優位は漁場に近い利点によつて与えられる。即ち、当時の漁場は「せいぜい数里乃至20里程度沖合のもので、当時は最も沖合的のものではあつたが、人力による漕航によつてはその出漁範囲は極めて明瞭な限界を持つており、その範囲で極限に達していたといえよう」(日本漁業経済発達史序説)とすれば、その範囲内に宇治群島、竹良、草垣(46湊)という漁場をもつことは極めて有利であつた。加えて、南薩漁場は瀬付の鯉が豊富であり、他の場合の如く洞遊鯉を発見する必要がなかつた。機動性のない場合、これは決定的に有利である。

而も一方、市場との関係においては物資の運搬が海上であり、古くより貿易港、密貿易港であつて、上方への回船問屋もあつて、交通手段を所有し、「藩の荷物の上に鯉節を積んだもので」(森吉兵エ氏談)あつて輸送費も節約された。更に当時は鮮魚輸送が少く、市場との遠隔という不利は表面化しない。

かくして当初における坊津鯉漁業の発展の可能性が与えられる。

第2表

	坊の岬より	年 代
梅 吉 曾 根	43 湊	明治 初 年
東 四 新 曾 根	55	19 年
釣 込 曾 根	98	24 年
ド ン コ 曾 根	83	29 年
盲 曾 根	77	37 年

(旧坊泊水産誌)

尙、漁場の有利性は帆船時代にも続く。曾根と呼ばれる瀬付場所の発見の表を見ると左の如し。

この他に十島と呼ばれる島々は漁場であり、風の都合によつては、それらの島々で避難し、製品化する便を与えたものであつた。かかる目当をもつ事は当時の機動力にとつては、有利さは言を俟たない。「ドンコ曾根には一かけ二かけ、盲

曾根には命がけ」という俚謡は、風下に目当の島がない盲曾根(77湊)と目当のあるドンコ曾根(83湊)との相違を示すと共に当時の航海の限度をも示している。

2. 衰退の原因は次の如く考えられる。

先ず明治以降の交通の発達によつて市場と遠い不利が出て来る。交通手段の改善は画期的な一つの変革を与える。陸上交通の発達には、坊津にとつては、海上交通を奪うものであり、比較的には反つて市場と隔てられた事になる。而もこの交通の発達は新しい競争者を市場に引きよせるのである。加えて市場に遠ざかることは競争下に必然な品質の改善等におけるおくれを必至とする。水産誌は次の如く書いている。

「天保安政の間、最も盛んにして坊に製造家 16 名あり、鯉漁船 23 艘に増加し、豊漁の年は 1 艘漁獲高 2 万尾、少き年は 1 万尾を数え鯉節の生産額百万本以下にのぼり下凋、大阪方面へ移出し品質も改良され従つて価格も相当騰貴し来つた。文久より明治元年の頃には鯉漁船 27 艘となつた。」が「明治 2 年より同 10 年の頃には漸次衰えて来たが、しかし鯉節の製造法の改善に努め土佐節に匹敵せんものと研究せしも及ばず価格も 2 割程度低下していた」。「明治 11、2、3 年頃には不漁で漁獲も減少せしが価格は相当騰貴したる為当事者は経営上左程の困難を感じなかつたが、14 年より 16 年の 3 ケ年間は鯉漁業は不況の一路を辿り製造家 19 名、鯉漁船 27 組となり鯉節 3 ケ年平均 50 万本という状態であつた。16 年以降も不景気がつづき従業者は船主 16 名、鯉漁船 24 組で何れも天保以前より継続せし子孫であつた。」

然し乍ら、決定的な打撃は漁業における偉大な改革、動力船の発現を契機に与えられる。即ち、その機動性の拡大によつて漁場に近いという優利性を失う。瀬付の鯉より河遊の鯉は餌付が良好である。拡大された漁場で他県の船は生産を拡大する。更に魚群を追つて基地を漁場近くに求めることも可能になつた。

東海漁業の列を見ても大正 11 年には既に鹿児島県七島沖に出漁をしているし、それ以前に金華山沖、銚子沖の鮪漁業などとの兼業をするなど、その機動性を發揮している。かくして、漁場は独占されないものとなつて有利さを失うと共に、明治 40 年に始まる冷凍貨車の発達によつて鮮魚輸送力が増大し、遠隔地の競争力は弱められてくる。前表に見る如く、坊津においても動力化は勿論、生産を高めている。帆船時代の毎艘平均 1 万尾に対比すれば遙かに上廻る。然し乍ら、金額はこれに比例しない。かくして、全国にさきがけた新技術そのものによつての潰滅的打撃は坊泊水産会社の解散という形に集中的にあらわれる。昭和 10 年、坊津の鯉船 17 隻、天保年間よりの業家は只 1 家であり、それと共に坊津は発展の後に残される。動力船使用後の新漁場発見はこの模様の一指標となる。

右表中、坊津が発見したるものは 120 湊の臥蛇西迄であり、他は枕崎及び県試験船の大型船によるもので、既に坊津とは縁うすきものである。

3. 最後に言うべき所は資本の問題であらう。何故かならば、かかる自然条件は可能性であり、これを決定化させるものは資本に他ならないからである。

まず、漁業発展の第一段階において坊津が全国にさきがけて会社を組織し、動力化を可能にしたのはその過去において

第 3 表

	坊岬より距離	年
五号曾根	120 湊	大正 1
八号曾根	130	1
臥蛇西	120	2
大東島	330	12
久米西	340	14
宮古曾根	495	14
八重山	650	昭和 6
比北区	900	6
スール海	1600	7

蓄積された資本であつた。即ち、前述した如く、密貿易港として有利な地位にあり、五島、天草を支配する資本が尙、その頃には残つていたのである。株式募集に当り、予定を突破する成績はその証明となる。

然し乍ら、その蓄積された資本が、鯉漁業そのものに基因しない事が一時は全国的先進地を形成しながら10数年のうちに蓄積された資本を消滅させ、より大きな資本を必要とする漁船大型化の時代——漁業の第二発展段階——に脱落せざるを得なかつた理由である。勿論、これとて市場より遠隔の地であるが故に手続きの面において、或いは金融機関としての結び付きの面において不利を免れなかつた事は察しられる。

然し乍ら、鯉漁業否、漁業そのものがおかれた社会関係、日本資本主義社会における漁村の地位の運命とも云えるであらう。社会の発展は急であり、漁村内で蓄積があつたとしても、より以上の資本を要求し、他の部門よりの資本の流入なくしては対抗出来なかつたのである。

その意味において古い生産関係は清算され、資本の流入に適当な関係が必要であつたといえよう。「反対船」といはれながら個人船の増加が「会社」を倒してゆくのである。前にも述べたが昭和10年には天保よりの業者は既に姿を消し、業主は船頭であつたもの、或いは船頭が主で(17隻中12を占める)あることは、金主と漁撈長との結びつきという形で資本の流入の形を示している。この形では、然しながら、只鯉漁業が維持されていることでしかない。

そして終戦後、復金及び他の公庫よりの融資物資が支配的となるに及び、平等に資本の分散の利益をうけを再び、発展の傾向をとり得たのである。

坊津鯉漁業の歴史は以上の事を物語る。

### Résumé

Bōnotsu occupied a not unimportant position in the developmental history of Bonito-fishery, by dint of its leading geographical features in Japan Islands. Nevertheless, gradually, it has lost its predominant position.

In this paper, the author analysed the reason of its vicissitudinous transformation, fixing its position in the developmental process of Japanese fishery-economy.